

矢内原忠雄著

余の尊敬する人物



岩波新書

boreas

eurus

矢内原忠雄著

余の尊敬する人物

zephyrus

notus

矢内原忠雄

1893年愛媛県に生まれる

1917年東京大学法学部政治学科卒業

東京大学名誉教授

1961年没

著書—「矢内原忠雄全集」(全29巻)

「続余の尊敬する人物」(岩波新書)

訳書—ホブスン「帝国主義論」

余の尊敬する人物

岩波新書(赤版) 65

昭和15年5月30日 第1刷発行

昭和47年3月21日 第35刷発行



著 者 や ない はら ただ お
矢 内 原 忠 雄

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

長野市中御所 2-30

印 刷 者 田 中 忠

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

序

私の崇拜する人物は唯一人ですが、尊敬する人物はここに挙げた四人の外にも多くあります。又他と比較してこの四人を最も尊敬するといふのでもありません。ただ手近に居た人々の中から選んだに過ぎません。本書の爲めにも、この四人の外にルッター、クロムウエル、及び内村鑑三を入れる心組でありましたが、原稿を書いて見ると四人で豫定の紙數が満ちましたから、他は手をつけずにしまひました。

之は傳記でもなく、人物評論でもなく、又人物による社會評論でもありません。ただこれらの人々の如何なる點を私が尊敬するか、それをお話して見たいと思ひました。もちろん好奇心ではありません。そのやうな人物が、今の世にも欲しいと思ふからです。

エレミヤの言葉は舊約聖書エレミヤ記から、日蓮の文章は日蓮上人遺文集から引用しました。又リンコーンの傳記は主に Charnwood, Abraham Lincoln, 1917. により、新渡戸

博士については私自身の直接の見聞を主としました。

外に申すことはありません。簡単な本ですから、御一讀下されば私の精神はおわかり頂けると思います。

昭和十五年三月三十日

矢内原忠雄

日

次

次 目

三	佐渡流罪	七六
四	身延隱退	九〇
五	日蓮の修學	九五
六	日蓮の信仰と性格	一〇一
リ ン コ ー ン		一一八

一	青年時代	一二八
二	州會議員より大統領當選まで	一三〇
三	南北戦争	一四七
四	大統領再選	一六二
五	リンコーンの性格	一七一

新 渡 戸 博 士		一七九
-----------------------	--	-----

一	入學式演説	一七九
二	新渡戸博士の教育精神	一八九
三	一高校長を辭した時	一九七
四	晩年	二二三

エ レ ミ ヤ

一 預言者の自覺

エレミヤといつても、多くの人はその名をさへ知らぬでせう。彼はユダヤが未だ獨立の王國であつた時代、西曆紀元前七世紀半頃に生れた一人の預言者です。今からおよそ二千六百年前、即ち日本紀元の元年に近き頃でありまして、隨分古い時代のことです。しかし彼の心臓に脈搏つた血は、今日の我々にさして遠いものではありません。

エレミヤの生れた時の國王はマナセでありました。マナセは惡王であつて、その五十五年に亙る長き治世の間に、さまざまの偶像崇拜が盛に行はれ、口寄せ、卜占等うらなひの迷信が流行し、宗教は不純化しました。宗教が墮落して、道德は墮落し、政治は腐敗せざるを得ません。エホバの神殿の傍には男娼の家があり、婦人たちはその家でアシラ（イシタル神）

の爲めに幕を織りました。無辜の血は流され、貧しき者の權利は押し枉げられ、正しき裁判は行はれなかつたのであります。

ユダヤ人の宗教は目に見えざる靈的の神エホバをば、天地の創造者、歴史の主宰者たる唯一の眞神として禮拜するにあります。靈的の神であるから、之を形に現すことが出來ず、唯一の神であるから、心を専らにして之に事ふべきでありました。之に對しすべて形體的に現される神々を偶像と稱して、エホバの神と區別したのです。

當時盛に行はれた偶像崇拜の一つに、「天后」を祀ることがありました。之はバビロンではイシタル、アッスリヤではアシラ、フェニキヤではアシタルテと呼ばれた神で、金星を拜む星祭であり、特に婦人たちが學問技藝又戀愛の神として祀つたのです。いはば七夕祭のやうなものであります。又「モロク崇拜」といふのがありました。之は初子をば火に焚き、若しくは火の中を歩ませて、モロクの神に犠牲とする殘酷な禮拜を以て有名でありました。この外モアブからはケモシ崇拜など、周圍の諸國から各種の偶像崇拜が輸入されました。パレスチナの地の先住種族たるカナン人の神バアルも、農業豐熟の神として祀られました。國中いたるところ様々の偶像や、柱や、祭壇が建てられ、神々の數は邑の數にひ

としく、迷信は横行し、信仰は物慾的となつて靈的純眞を失ひました。外見的には政治は安定し、經濟は繁榮し、文化は興隆したかの如くであつたけれども、國民の精神は傲慢と虚偽とに蝕むしばまれたのであります。

エレミヤの故郷は都エルサレムより北東へ六籽ばかり、眼界遠く北及び東に向つて開け、エフライムの連山とヨルダン谿谷の叢林を望む丘腹の、アナトテといふ小さい村でありました。其處には古くからエホバの祭壇があり、それに事へる祭司の一人ヒルキヤの子として、エレミヤは生れたのであります。彼の心に、幼い時からエホバに對する敬虔が宿りました。そして春は巴旦杏はたんきやうの花咲くを見、秋は候鳥わたりどりの北から來るのを眺めつつ、周圍の自然を學校としてその中に育つたのであります。

彼は氣立の優しい、家庭的な子供でありまして、炊事場を手傳ふことも度々でありました。村人の生活も彼に親しきものであり、陶工の仕事場の前に立つては、轆轤うくるにかけられて陶土が形に成つて行くのを飽かず眺め、村に婚禮がある時は、欣喜の聲、歡樂の聲、新郎の聲、新婦の聲のする家に入出入するを楽しみました。

このやうにエレミヤは神を愛し、自然を愛し、平民を愛しつつ、アナトテの田舎村に靜

かに成長しました。しかし二十歳も過ぎてやうやく社會の狀態が見えるやうになつた時、都にも鄙にもあまねく行はれる偶像崇拜と迷信、道德と政治の腐敗が彼の純粹な心を驚愕させたのです。

誰か起ちて宗教の革正を叫ばなくてもよいのであらうか。エホバの神は見て居給ふのであらうか。かく國民の信仰が腐敗しても、神の罰は臨まずにすむのであらうか。日の沈む時エレミヤは野に出でてかく思ひ、日の昇る時丘に立つてかく思ひめぐりました。

或る日突然、エホバの御言を彼は聞きました。曰く、

「われ汝を腹につくらざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に汝を聖め別ち、汝を立てて萬國の預言者となせり。」

思ひもよらぬ御言であります。なるほど、國に滿つる偶像崇拜を見てわが心はエホバの爲めに燃え、誰か眞の預言者が出てこの腐敗を除き、エホバの宗教を輝かすことを、我が待ち望んだのは事實である。しかしこの自分が萬國の預言者として起つなどとは？ とんでもない！ 彼は自分の心にささやかれた聲を卽座に否定して言ひました、

「ああ主エホバよ、見よ我は幼きにより語ることを知らず。」

田舎者であり、殊に年少の私は到底人の前に立つて口をきくことなどは出来ませぬ、と答へたのです。然るに重ねて神の聲が聞えました、

「汝われは幼しといふなかれ。すべてわが汝を遣すところに往き、わが汝に命ずるすべてのことを語るべし。汝かれらの面を恐るるなかれ。そは我汝と共にありて汝を救ふべければなり。」

躊躇逡巡するエレミヤに對し、神は大なる權威を以てかく強要し給うたのであります。

エレミヤとエホバとの間に押問答があつた末、エホバは遂にその手をのべてエレミヤの口につけて言ひ給ひました、

「見よ、われ我が言を汝の口に入れたり。我今日汝を萬民の上と萬國の上に立て、汝をして或は抜き或は毀ち、或は滅し或は覆し、或は建て或は植ゑしめん。」

今日汝を預言者に任じ、汝の言に神の言の權威を賦與する。汝の言に従ふや否やによつて、萬國の盛衰興亡は定まるであらうと。——渺たる田舎祭司の子青年エレミヤは、かくして神の言を唯一の武器として、萬國に對抗して起たしめられたのです。時はヨシヤ王の十三年（紀元前六二六年）、エレミヤの年齢は二十歳か二十二、三歳か、その邊であらうと推

測せられます。

思ひもかけぬエホバの御言を宿してから、エレミヤの心にほのかなる預言者としての自覺が生じました。幾度か打消さうとしても、打消し得ざる聲であります。しかし民衆の前に立ちて演説するなどは、とても出来さうな話ではなかつた。始めて懐胎した新婦のやうに、エレミヤはひそかなる畏怖と不安の中に幾日かを過しました。或る日野を歩んで居た時、彼はふと巴旦杏^{はたんきやう}の枝に花の咲いたのを見ました。巴旦杏は眼覺めの樹と呼ばれ、日本でいへば梅のやうに、冬枯の萬物にさきがけて花をつけ春を知らせる樹であります。

「あ、巴旦杏の花が咲いた。」さう思つてエレミヤは立ち止まつて見入りました。その時エホバの言が彼に臨んだのであります。

「エレミヤよ、汝何を見るや。」

「巴旦杏の枝を見ます。」

「汝善く見たり、そはわれ速かにわが言を爲さんとすればなり。」

さうだ、神は見て居給ふ！　そして速かに御言を實行し給ふ！

國民の偶像崇拜と信仰の墮落とをエホバは見給はないのであらうか、神の義^{ただ}しき支配は

どうなるのであらうかとは、豫てエレミヤの抱いた疑問でありました。然るに今眼前一枝の巴旦杏の花は、彼にとりて靈感でありました。神は眠つて居るのではない。見給はないのではない。ただ時を待つて居給うたのである。この花が咲いてゐる以上、神の審判さばきが行はれて義しき秩序の春が返るのは、もう遠いことでない。

しかし神が速かに爲すと言ひ給うたその事の内容は何であらうか。或る日彼は炊事場で大鍋を煮てゐました。強い風が北から吹きつけて、沸騰した鍋の湯氣が濛々と此方に向つて來ます。その時突如として神の聲が彼に臨みました。

「災禍わざはひ北より起りてこの地に住める凡ての者に來らん。」

その四五年前から、小アジアの北、黒海沿岸地方を本據とするスクテヤ人といふ蠻族が南下運動を起してアッスリヤの邊境を荒し、その風聞はユダヤの國にも達してゐました。今や北方地平線上に現れた一點の暗雲はどんどんその姿を濃くし、戰慄すべき北禍來の危険がユダヤに迫りつつあることを、エレミヤは示されたのです。危い！ 若しも國民が速かにその罪を悔改め、惡しき途を離れ、惡しき行を去らなければ、わが愛する國土は北方蠻族の馬蹄に蹂躪せられるであらう。

神の御旨はもはや疑ふべくもありません。しかし之は何といふ怖しき内容の預言でありませう。之を宣べようとして、若きエレミヤに逡巡の色なきを得ませんでした。然るに神は彼を勵まして言ひ給ひました。

「汝腰に帶して起ち、わが汝に命ずるすべての事を彼らに告げよ。その面を恐るるなかれ。然らざれば我彼らの前に汝を辱かしめん。見よ、我今日この全國とユダの王とその牧伯つかさとその祭司と其地の民の前に、汝を堅き城、鐵の柱、銅の垣と爲せり。彼ら汝と戦はんとするも勝たざるべし。そはわれ汝と共にありて汝を救ふべければなり。」

エレミヤは絶體絶命です。進んで語らんか、國民は彼を迫害するであります。退いて語らざらんか、神は彼を辱かしめる！ エレミヤは國民の迫害よりも、神の辱かしめを恐れしました。彼は一時の苦痛であり、此は永遠の滅亡です。彼は生活の問題であり、此は良心の問題です。一度び國民の前に立つて之を語らんか、それは必然的に戦であります。預言は戦であり、戦なくして預言はありません。しかし神は彼と共に在りて、すべての敵の攻撃に對し、彼を難攻不落の金城鐵壁たらしめ給ふといふ。この信仰に勵まされて、青年エレミヤは國民の前に起つたのであります。彼は必死になつて叫びました、

「見よ彼（北方の蠻族）は雲の如く上り來らん。その車は颶風の如くにして、その馬は驚よりも速し。ああ我らは禍なるかな、我ら滅さるべし。エルサレムよ、汝の心を洗ひ潔めよ。さらば救はれん。汝の惡しき思ひいつまで汝の中にあるや。ダンより告ぐる聲あり、エフライムより災禍を知らす。汝ら國々の民に告げ、又エルサレムに知らせよ。攻め圍む者遠き國より來り、ユダの諸邑に向ひてその聲を揚ぐと。彼らは田圃をまもる者の如くに之を圍む。こは我に従はざりしに由るとエホバ言ひ給ふ。汝の途と汝の行之を招けり、之は汝の惡なり、誠に苦くして汝の心に及ぶ。」

エレミヤの心は、愛する國土が既に蠻族の馬蹄に蹂躪せられるを見る如くに痛みました、
「ああわが腸はらわたよわが腸よ、痛苦心の底に及びわが胸とどろく。我默し難し。わがたましひよ、汝喇叭の聲と軍の関いくさを聞くなり。敗滅に敗滅の知らせあり、この地は皆荒され、わが幕屋は俄かに破られ、わが天幕は忽ち破られたり。わが旗を見、喇叭の聲を聞くは何時までぞや。」

國民の罪が國の災禍を招くのである。汝ら偶像崇拜を去れよ。無辜の血を流すな。貧しき者を虐ぐるな。然らざれば大なる災禍が北より來つて、この國と民とに滅亡が臨むであ

らう。エレミヤは必死になつて、このやうに叫んだのであります。

然るに國民は年若き預言者を侮り、嘲笑して答へて言ひました、「我らは汚れない。我らはエホバを拜するのを止めたのではない。災禍の我らに及ぶことはあり得ない」と。蓋し國民は偶像崇拜を惡事と思ひません。又偶像崇拜とエホバ禮拜とが兩立して、その間何等差支がないと考へたのです。しかしエレミヤに取りて、エホバに對するかかる不純な心の態度は堪へられぬことでありました。エホバのみを唯一の神として拜しないことは、不信仰である。否、單なる不信仰よりも尙ほ悪い。それはエホバに對する不貞操である、姦淫である。——年こそ若けれ、エレミヤは國民の詭辯にごまかされるやうな人物ではありません。彼は飽くまで争つて叫びました、

「汝言ふ、我は罪なし、故にその怒は必ず我に臨まじと。見よ、汝われ罪を犯さざりしと言ふにより、我汝と争ふべし。」

又、

「ユダは眞心をもて我にかへらず、偽れるのみにエホバ言ひ給ふ。」

問題は心にある。心の純不純にある。然るに汝らは形だけエホバの禮拜を維持して居れ